

もっと知りたい
ふるさと

53

立川の彫刻がある
土口の古大穴神社

土口の集落の北の端、北山の山腹から山麓にかけて古大穴神社が鎮座している。

当神社は諏訪大社の分社であるが創建年月は不詳である。江戸時代中期、享保12年4月（1727）に社殿創建とあるのが最も古い記録である。

諏訪信仰の歴史は古く、民間信仰として全国的な広がりを見せ、分社は全国に及びその数の多いことで知られている。私たち土口の祖先も、産土神（生まれた土地の守護神）として諏訪分社を祀り、その崇敬祭祀は、子孫に受け継がれて村共同体の統合の基盤ともなってきたのである。



拝殿の外側 鈴のある後ろを向拝という

本神社の祭神は、建御名方命と八坂刀売命で、以前は諏訪大明神と呼ばれていた。民間信仰には移り変わりがあり、古来、狩猟神・農業神・武神として信仰されてきたが、現代は平和な生活維持を願う神となっている。

社名は明治13年（1880）に「社号は所在する地名を付けること」との国の指示で、現在の古大穴神社と改名したものである。「雨宮県村誌」によるとこの大穴の名は、平安時代の天曆、康保の年代（950年ころ）に「この地域は太古、穴居宮窟（俗に塚穴）が多く、郡中他に比類なきほどであり、村居の北方の北山の半腹より麓にかけて坑居相連なりその数百有余、遠く望めば室居の如く見ゆ」とある。「里老伝えて人民の祖先の居なり」と言う。また、「大穴郷（大穴、多穴あるいは於保奈）の由にて起りし処、土口の名、またこれに基づくなり。殊に今の社の石階のある処にあった窟の如きは区内第一の広大なもの由、この社は古くはこの地の



拝殿の中の様子 本殿は見る事が出来ない

長（郡領）を祀りしか。永遠の天才にて確証なし」とも言う。

現在の神社の拝殿は慶応3年9月（1867）に建て替えが始められ、3年後の明治3年9月に出来上がったものである。

拝殿の彫刻は立川和四郎の弟子であった池田文四郎（後に立川文四郎を名乗る）の作である。正面向拝上の虹梁は牡丹に夫婦の唐獅子が子獅子を見守る彫りが両端にあり、左側には玉の透かし彫りがある。その虹梁上には夫婦の竜がやはり子供の竜を見守る立

派な彫刻である。向拝の内側の虹梁には浪にたわむれる千鳥が10羽遊んでいる。この彫刻が裏表にある。

右側の上端には海老虹梁があり、老松に鶴2羽が遊んでいる。また、墓股と思われる場所の右側には伝説の酒呑童子2人が大瓶の両側で大盃を持ち柄杓を肩に担ぐ者、手に持って汲まんとする者になっている。左側も同様に柄杓を持つ者、左手に扇をかざしている者がいて、手挟には大海原の浪に浮上して海草のついた老亀2匹が彫られている。

拝殿の最後部の小さな建物が本殿が入っている覆屋である。その本殿にも拝殿と同様すばらしい彫刻がある。彫り師は不明であるが、拝殿の竜など似た彫刻であることから立川流の彫り師のものと考えられる。

小さな区の神社に、このような立派な彫刻があることは驚きであり、我が土口の誇りでもある。近在では当神社の他に粟狭神社、八幡の武水別神社、森の興正寺の山門に立川流の彫刻がある。

参考文献

『雨宮県村誌』

土口 飯島 英雄